

( 研究ノート )

## C・S・パースとR・デカルト

—— パースは、デカルト哲学を如何に解釈し批判をしたか ——

荒井正雄

### α. 「研究ノート」の作業的狙い

「研究ノート」の目的は、近代の哲学者が、デカルト哲学の根本命題「コギト・エルゴ・スム」を自らの哲学体系においてどのように解釈し、批判しているのか、その確認作業である。

デカルト哲学は、なぜ近代哲学者によって肯定的に支持され或は否定的に批判されたのであろうか、その根拠は、何処にあったのか。端的に言えば、デカルトが、属性としての人間(有限実体)を精神と身体に区別し、懐疑論者との対決を通して「私」(実体)の確実性を試みた先駆的な哲学者——近代ヨーロッパの新しい原理を探索し、構想した「近代哲学の父」として哲学史上に位置付けられるキー・パーソン(近代化を築いた哲学者の一人)であった、その位置づけに起因する、と筆者は、捉えている。

哲学史を辿れば、デカルトによって提言された「神は存在する」は、「私が存在する」＝明晰判明な哲学原理の根拠であるのだが、認識主観(Ich denke)をテーゼとするカントによって否認され、世界精神(＝神)の自己展開を世界秩序と解釈し自らの哲学の中核にすえるヘーゲルによって再承認(回復)された、哲学史を歩んだ。

ところで筆者は、カント、ヘーゲルのデカルト解釈・批判と西田幾多郎のそれを哲学会誌『哲学と教育』に掲載の拙論でごく簡単に確認したことがある。その学的作業の延長に立つ「研究ノート」の狙いは、プラグマティズムの創始者で「アブダクションの論理学」を提唱したアメリカの哲学者 C・S・パースに焦点を当て、彼が、デカルト哲学を如何に解釈・批判をしたか、その確認作業である。

なぜパースを採り上げたのか。京都大学人文研の所長を務められた恩師の故上山春平先生が提唱したテーゼ「哲学の本質は、『問い』にある」は、パース論理学の「アブダクションの論理」に直結すると、筆者は、捉えており、その意味で哲学は、パース哲学の用語を模して言えば「問題設定(問い) → 探求(論証) → 問題解決(仮説の確立)」の論理過程を辿る学問、——この、筆者の持論(「問い」の重要性)が、パースを採り上げた「研究ノート」の出発点である。

### β. 「解釈と批判」の確認作業

#### I. デカルト哲学の思想史的役割

##### 1. 懐疑主義者とデカルト —— 17世紀ヨーロッパの「思想の危機」状況を巡って——

認識的自我＝精神・理性を探求したデカルトの、哲学の第一原理「われ思う、故にわれ在り」(cogito, ergo sum)が言明されているのは、『方法序説』「第四部」である。17世紀ヨーロッパの思想的実相は、形骸化された文明に支配され、確実なものが何一つないといと認識(懐疑主義)する無思想的な「危機の時代」であった、かかる懐疑的精神状況(ピュロン主義的な思想状況)を乗り越えるための、新しい学問の原理——すべての学問の根拠となる「絶対確実な原理」を探求したのが、デカルトであった。デカルトは、有限実体としての精神(理性)＝「考える自己」を第一原理とする、その正当性を、『方法序説』に於いてこう説明している。

- (1)「私は考える、ゆえに私はある」Je pense, donc je suis というこの真理は、懐疑論者のどのような法外な想定によっても揺り動かしえぬほどに、堅固な確実なものであることを、私は認めたから、私はこの真理を、私が求めていた哲学の第一

原理として、もはや安心して受け入れることができる、と判断した（第四部）。

(2)私が明らかに真理であると知ったもの意外は、すべて決して真理と認めないこと（第二部、四規則の「第一規則」＝「明証の規則」）。

(補足) 四つの規則は、「権威よりも理性にしたがうこと、明晰判明を尊ぶこと、論証を重視することを含んでおり、デカルトの合理精神を示すもの」である（古田 光、泉谷周三郎編『ヨーロッパの文化と思想』泉谷周三郎「科学革命。市民革命・産業革命」木鐸社）

(3)「私は考える、ゆえに私はある」という命題において、私が真理を明言していることを私に確信させるものは、考えるためには存在せねばならぬということをきわめて明晰に私が見ることより以外に、まったく何もない、ということをも認めた……（第四部）。（野田又夫訳：『世界の名著 22』中央公論社）

デカルトが、強調する「方法」とは、「複雑な現象を、自明の真理で説明できるような最も単純な構成部分に還元しようとする、慎重な系統的な研究方法」だ、と J・H・ブラムフィットは解説している（『フランス啓蒙思想入門』白水社）が、「純粋な精神」である最も単純な「われ」の存在は、第一の形而上的真理である（野田又夫『西洋近世哲学史』アテネ文庫）。

ところで文節の「懐疑論者」とは、神や真理の存在を疑ったピュロン主義者（自由主義者 libertins 確実なものは、何一つないと主張）のことだが、懐疑主義者が「変転定めなきこの世には確実なものは何もない」と「学問的真理」を否定する「法外な想定によってもゆり動かしえぬ」「確実」な「真理」——対象について「思考する私」の存在は確かである——が、「コギト エルゴ スム」だと、デカルトは、確信を持って言明した。換言すれば、懐疑論者が全ての外的な対象＝存在を疑っても最後に疑う「私」が存在することは、形而上学的真理である、とデカルトは、懐疑論者に対して自らの哲学の正当性（真理は、「理性に適った」確実性によって決定される）を宣言したのである。この命題は、神（無限実体）の被造物である「思考するもの」（res cogitans 思考する存在者）としての「私」（有限実体）の本質＝「ただ考えること」の確実性を明晰判明な第一原理——「考えられた絶対確実な真理」（私は思考する、故に私は存在する res cogitans）として論じたのである。

独断論(dogmatism)と懐疑論(Pyrrhonism)が渦巻く「危機の時代」（田中仁彦は、『懐疑主義哲学について』を執筆した懐疑主義者ラ・モット・ヴァイエに対する強い危機感がデカルトにはあった、と指摘する『デカルトの旅／デカルトの夢——「方法序説」を読む——』岩波書店>。）の只中でデカルトは、自らの哲学を「一本の樹」体系（理性論）として構想し、樹木の「根」（形而上学的真理）＝真実在（明晰判明な「知」は、理性に適った「真理」）の正当性を懐疑主義的な17世紀の思想界に向かって宣言した、——リベルティナージュ(libertinage 自由思想、無信仰)の克服である。その意味で「われ思う、故にわれ在り」は、構想したデカルトの、真の哲学の根本原理（根＝絶対的理性）であり、「方法的懐疑」は、懐疑主義者への巧みなアンチ・テーゼ、疑っている「私」（懐疑主義から脱却した有限実体としての精神、理性）の存在は確実であることをピュロン主義者に突きつけたための定式化の作業である（田中仁彦は、「デカルトの形而上学は、反リベルタン哲学」と規定する）。

## II. デカルト哲学を巡る 一、二の問題

1、デカルトは、なぜ兵舎の炉部屋で思索したか？——17世紀「小氷期」の影響を探る

17世紀の気象現象は、「小氷期」(little ice age)で、気候の悪化による疾病と人口の減少、生産の落ち込みによる飢饉が猛威を振るった、といわれる（遅塚忠躬『ヨーロッパの革命』講談社）。ヨーロッパを支配した気象的実相を踏まえた時、「思索の旅」に出たデカルトが、「心ひかれた」30年戦争（1618—48）の1619年冬（休戦状態）にドナウ河畔にあったドイツ軍兵舎の炉部屋にひとり閉じ籠もって思索し「われ」（実体）を構想したことの疑問——懐疑主義者と対決し「学問を根底から作り直す設計者」として新しい学問の構築に何故耽ったのか、その謎が、解ける（『方法序説』「第二部」に「私は終日炉部屋にただひとりとしこもり、このうえなくくつろいで考えごと

にふけた」とデカルトは、記している。「一人の建築家が設計し完成した建物は、」「美しくまた秩序だっている」(『方法序説』「第二部」)との信念で思考した兵舎の炉部屋は、他者の干渉を受けず寒冷から身を護りながら、思想的「危機の時代」(文明的にも、気候的にも)を生きるための自己意識(個)を探索するうえで、最適な場所であった(田中:『方法序説』「第二部」は、デカルト哲学の設計図<『方法序説を読む デカルトの旅/デカルトの夢』>)。つまり「小氷期」の気候が、デカルト哲学誕生に深く関わっていた、と言う歴史的事実である。管見の範囲であるが、デカルトに関する「気候と思索」の哲学的な考察は、先学者には見当たらない。

紀元前585年タレスが行った「日食の予言」は、「ギリシャ哲学の誕生」となり、下って1543年に出版されたコペルニクスの『天球の回転について』は、旧来の世界観を決定的に覆し、思想史上に絶大な影響を与え、近代自然科学の出発点となった(パースの『論文集』「進化の三様式」)。天動説を覆した「地動説」は、ケプラーの「惑星の楕円軌道に関する三大法則」の発見で確立した。「宇宙が統一的な法則体系に従う」とするテーゼは、外的な環境(客観)と思考する主体(主観)が、思想史を紡ぐ相互要因となった事を意味する。この近代思想の進展過程を踏まえて言えば、「気候は、思索に影響を与える」と考えられるのではないか。タレスの活躍したB.C6世紀ころの気候状況は、筆者にとっては、不明だが、コペルニクスが活躍した16世紀のヨーロッパは、「リトル アイス エイジ期」であった、と指摘されている(鈴木秀夫『気候の変化が言葉をかえた——言語年代学によるアプローチ——』NHKブックス)。(17世紀の「小氷河期」時代を、ヨーロッパ史専攻の深草正博は、文明的な「17世紀の危機」と定義する、<論文「環境問題の文明的考察」皇學館大學『研究紀要』>)。

ところでホブズ、ロックによる17世紀の人間観は、「小氷期」における自然的人間の生存——大飢饉の襲来による食糧難と栄養失調等に伴う生命的な危機状況の中での対立抗争「万人の万人に対する戦い」(Bellum omnium contra omnes 自然状態)と、近代的自我(人格権)の確立であったと、考えられる。従って進歩のための「自然の支配」を目的としたベーコンの命題「知は力なり」(Scientia est potentia)は、「小氷期」の過酷な自然を支配し、「生産過程を人間の自然的な『有機的』(引用者注:肉体的)限界から解放する」(マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫 上巻)ための新しい科学と生産技術の向上を希求した「技術の哲学」(技術的進歩)のテーゼであった。換言すれば命題は、17世紀の近代思想形成(学問の進歩)に深く関わった「気候(飢饉)と思想・政治(個・人権)」を主題としている、と解釈できる。

筆者の拙い解釈を踏まえて言えば、ドイツの厳しい冬に一日中兵舎の炉部屋に籠って思索し、「学問の基礎を発見」するための設計者デカルトの探索的風景は、「小氷期」における「気候と思索」を離れては理解できず、30年戦争での「旧教と新教の対立」の問題は、デカルト哲学誕生には無関係であった。タレスやコペルニクスと同様、17世紀の「思想の危機」時代に近代的自我を自覚し、「考える私がある」を第一原理とした「信念」を確立したデカルトは、ヨーロッパ思想史の転換点に立つことから「近代哲学の父」と位置づけられた、とすれば17世紀の文明的・思想的な「危機の時代」は、デカルトにとって小氷期に生きる人間＝自己意識(デカルトの「自我」は、「精神的実体」)の探求の時代と意識されていた、といっても過言ではない。筆者にとって興味深い問題である、どれだけの考察が可能であるのかは不明だが、他日の問題としたい(桜井邦明『太陽黒点が語る文明史——「小氷河期」と近代の成立——』中公新書、特に深草正博『グローバル世界史と環境世界史』青山社からヒントを得た)。

## 2、精神医学者が、解釈したデカルト哲学の「思う」——「脳と心」の問題——

心が「生活に則して人間がわかるようになったのは、ルネッサンス以後の」近代からである、とした上で精神神経学専攻の平井富雄は、「心とは何か」について、以下のように説明する。

心とは、日常生活のなかの「現象」であり、そしてまた「本質的自己」である……これを本質的直観というが、脳と無関係ではない(『脳と心』中公新書)。

平井と同一の「脳 — 心」論に立つ精神医学者千谷七郎は、文豪夏目漱石の精神不安＝「鬱病」を『漱石の病跡 — 病氣と作品から —』（勁草書房）の中で採り上げ分析し、漱石の作品に書かれた「思う」は、漱石自身の脳（＝頭、Regel：引用者補足 規則、規定）と心臓（＝心）の問題とする、その上で「思う」（引用者注：精神）ことは、脳だけでは出来ず「脳が心臓に傾聴しなければならない」と説明 —— 哲学と科学の相対性を根拠として「脳と心」を考えるべきだ、とする。

この持論に立脚して「精神の座を脳においたのはデカルトが最初」であると一般的に言うが、専攻の精神医学の観点から以下に掲げた否定的な批評を行っている。

デカルトによって脳（引用者注：精神）の価値が見出されたかのごとく解き廻っているが、少し迂闊である。インド最古文献リグ・ヴェーダの……中に既に「意向（クラトゥ）は頭（シャリーラ）に在り」と指摘されている。……ウパニシャドではアートマン（自己）の座を心臓（フリダヤ）に探し求めていた……。それが次第に頭でっかちになって心情を失い、やがて喪失しかかっているのが人類の「進歩」である。

近代を形成したデカルト哲学の、「理性に適った」真理「われ思う」〈精神、実体性〉に対す、精神医学からの論評は、筆者にとっては、耳新しい指摘であった、が、千谷によるデカルトの「コギト」〈「思う」：理知的な構構か〉の位置づけは、西ユーラシア系文明の発展過程 —— 特に17世紀（小氷期）西ヨーロッパにおける哲学、文学・文明の近代化と「我」（自己意識）の形成が不問とされ、古代インドのブラフマン（梵 brahman）とアートマン（我 ātman）を本質的同一とする梵我一如の思想に基づいた「頭と心」の問題となっている。

マックス・ヴェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus）で強調した近代資本主義の精神は、「冷静な克己心と節制」即ち「労働の自己目的」＝「使命（Mission）たる職業」（宗教的「勤労」 industria）と、「生真面目にまたたゆみなく綿密にまた徹底的に物事に打ち込んでいく」新しい形の市民的な営利心、——「打算と冒険」（プロテスタンティズムの倫理＝世俗内的な「禁欲」と結びついた新しい営利心）のことで、ヴェーバーは、西ヨーロッパ独自の精神であると論説する（梶山 力、大塚久雄共訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』二 資本主義の『精神』岩波文庫 上巻）。その上で資本主義の精神（世界像＝「救い」 Erlösung の理念）は、「組織的かつ合理化された」「転轍手」として、西ヨーロッパ社会の「人間の行為」（精神的、政治的、経済的な「進むべき道」）を決定する役割（軌道）を果たす、と説明している（マックス・ヴェーバー＜大塚久雄、生松敏三共訳＞『宗教社会学論選』みすず書房）。

資本主義の「精神」＝近代的な職業使命観が、17世紀西ヨーロッパ特有の世界像（西欧的基本「形」）であったとすれば、問題は、印度の古代哲学に限定された世界像（東洋的基本「形」＝主客未分の梵我一如）からのデカルト批判（「頭」の問題）に正当性があるのか、と言うことである。「自我」探求の現代哲学からの反批判があるとなれば、如何なる形で展開されるのか、系統的に異なる学問 —— 哲学は、理知的（頭）であり、精神医学は、心情的（心）であることから、論議（批判 — 反批判）の成立には、疑問であるが、興味深いものがある（平井富雄は、ヒューム、パークレイの経験論を採り上げて、「意識と脳」の関連が矛盾なく論ぜられている、と言及している＜『脳と心』中公新書＞）。

「研究ノート」の目的作業から若干横道に入った、確認作業に戻りたい。C・S・パースは、小氷期の悪条件の下で近代的な「個」（考える「われ」）の探索に深く関わったデカルトの命題 —— 自我（エゴ）が、現実の中心点となる —— をどのように解釈し、批判したか、デカルト哲学と小氷期の関連性には触れることはないが、以下若干の検討を加えたい。

### Ⅲ. C・S・パースのデカルト解釈と批判

#### 1. デカルト主義の特徴 —— 「先天的方法」による信念の確立

イギリス近代経験論の伝統を受け継ぎながら、従来の経験論の感覚中心的で、受動的、主知主義的な学的

姿勢を批判し、能動的な経験論を展開するのが、ハーヴァード大学で「形而上学クラブ」(The Metaphysical Club)を形成しジェームズらと共に活動したパースを理論的始祖とするプラグマティズムである(『パース論文集』第5巻11～13パラグラフ、以下CP5—11～13と略記。上山春平「パースの歴史観——プラグマティズム史観の各論的研究——」『思想』1952年5月号。拙論「探求と問題解決」『哲学入門——思想の歴史と論理学——』朝倉書店)。アメリカ思想の史的展開から言えば、「ヨーロッパ哲学の移植史」を清算する「思想上の『独立宣言』」であった(上山春平「哲学」、都留重人編『現代アメリカの思想』所収、河出新書)。

ギリシャ語の *pragma* (行動) を語源としてプラグマティズム (Pragmatism) と名付けた自らの哲学説をアブダクションの論理学として提唱するのが、パースである。1877年と1878年に『ポピュラー・サイエンス・マンズリー』(The Popular Science Monthly) に発表した論文(1877年 The Fixation of Belief 信念の確定、1878年 How to Make Our Ideas Clear いかにして我々の観念を明晰にするか。『パース論文集』CP6—487、論文の目的: 観念の真理性を経験及び行動に対する有用に求めた。)で「一種の論理的教義として」プラグマティズムを提唱したが、「プラグマティズムとは、探求の本性が、行為遂行のために、懷疑から脱出して信念の確定をもとめることにあり、と考える理論」(探求の本姓は、「信念の確定」)である(伊藤邦武『パースのプラグマティズム』)。

ところがパースは、1905年4月に『モニスト』(The Monist 15巻)に発表の論文「プラグマティズムと何か」(What Pragmatism Is)においてプラグマティスト一派と決別(ウィリアム・ジェームズは、プラグマティズム本来の立場である論理的方法<「科学的な探求」>を心理主義的方法に「ねじまげ」た、とパースは、主張)し、仮説をテストするための、自らの学説の格率を「プラグマティシズム」(Pragmaticism)と改名した(「プラグマティズムとは何か」世界の名著『パース ジェイムズ デューイ』所収、遠藤 弘編訳『パース著作集 3』<『論文集』>CP6—482)。

(プラグマティズムに決別し) 初めの定義をあくまで正確に保存しているということを表明させるために、わたしは新しく、プラグマティシズムという語(厳格な定義を備えた学説)をつくりあげ、ここにこの語の誕生を宣言する(括弧内、引用者)。

パースは、哲学用語を「初めの意味とはちがったほうへと歪曲する」ジェームズのプラグマティズムを「哲学への冒涇」と批判し、道理に適った自らの「新しい学説」(新語 *icism*)と区別する。そのための「必要な細則」が、決定されるべきであると「宣言」し、「細則」を以下のように説明する。

一定の接頭語や接尾語に、特定の意味を割り当てるのが賢明であろう。たとえば *prope* (引用者補足: ラテン語) という接頭語は、この接頭語が冠せられた語の意味を拡大し、やわらげるために用いることにする(引用者補足: 具体例「プラグマティシズムは、『広義の実証主義』 *prope-positivism* の一種」論文「プラグマティズムとは何か」とか、各学説の名称は、*ism* (で) 終わらせ、その学説がより厳密な定義をそなえている場合には *icism* という接尾語を使うことにする……(括弧内、引用者)『世界の名著』)。

思想の名称を変更した真意を語ったパースは、プラグマティシズムの格率が「(フェルディナンド) シラー氏や今日のプラグマティスト達の立場とは著しく異なった立場である」(括弧内、引用者)(CP6—485)、と具体的に名指をした上で、プラグマティシズムの原理について次ぎように言及している(シラー『ヒューマニズム』1903年、『ヒューマニズム研究』、ジェームズ『信じようとする意志』1899年、『プラグマティズム』1908年を踏まえた批判である。cf. 「IV—2」)。

真の探求は真の懷疑の状態が生ずるにいたって始めて開始され、信念に達するや否や終わるという単純な理由から、真理、すなわち探求の目的は「信念を固めること」、言い換えれば、満足の状態にのみ存する、と仮定している(遠藤 弘編訳CP6

ところでデカルトを「近代哲学の父」と捉えた上で、「近代の哲学者の大部分はデカルト主義者」と定義するパースは、デカルト主義の特徴を、『パース論文集』(The Collected Papers of Charles Sanders Peirce)に収録された論文「四個の能力の否定から生じる若干の帰結」(Some Consequences of Four Incapacities 1868年雑誌『思弁哲学雑誌』第2巻に発表、『世界の名著 48』『人間記号論の試み』所収)の中で批判的に論じ、デカルト主義の精神を「中世のスコラ哲学から区分する主要な点」であるとした上で、必然的帰結として肯定するデカルト主義の「4つの能力」を次のように説明している。

1. デカルト主義は、哲学が普遍的な懐疑から出発すべきであると主張する。
2. デカルト主義は、確実の究極的な吟味が個人の意識の内部で行われると主張する。

【引用者補足】デカルト哲学は、自己意識(self-consciousness)＝内観(introspection)の能力を「確実性」の判断基準とする。

3. 中世の複雑な論証法は廃棄され、平凡な前提から出発する簡単な推理法が新しく登場する。
4. デカルト主義にも……「神がそのようにお創りになったのだ」とでも証明しなければ証明できない、多くの事実が存在する。

【引用者補足】「神が創った」とする説明不可能な存在の証明は、「証明できない」。パースが主張する「探求の哲学」からの批判である。

(上山春平『弁証法の系譜——マルクス主義とプラグマティズム——』未来社、CP5—264)

注：論文「四個の能力の否定から生じる若干の帰結」『世界の名著 48 パース』には、『論文集』の巻数とパラグラフの表示がない

## 2、デカルト哲学(デカルト主義)の批判——反デカルト主義から——

近代科学、近代論理学の水準に立ち、徹底した反デカルト主義の立場からパースは、「わたしたちは完全な懐疑から出発することは不可能である」と言明し、「わたしたちは、心のなかでは疑っていないのに疑うふりをするような哲学的態度はやめよう」、「自分一個の力で、究極的な真理に達しようと希望してはならない」(「正真正銘の懐疑は、いつも外部的なきっかけによって生じる」、論文「プラグマティシズムの問題点」Issues of Pragmaticism 『モニスト』第15号に発表、『世界の名著 48』所収)と、デカルトの「先天的方法」(cf. 後述する4種の「信念確定の方法」の1つ)に対し厳しく批判する。その上で「思想と事実の一致(引用者補足：真理、信念の定立)という結果を生じるのは『科学の方法』の特権である」(To bring about this effect is the prerogative of the method of science)ことを、論文「信念の確立」(The Fixation of Belief 『ポピュラー・サイエンス・マンズリー』誌に1877年発表、『世界の名著 48』「現代論理学の課題」第一章「探究の方法」所収)において強調している(原文の this effect = opinions to coincide with the fact)。

パース論文「四個の能力の否定から生じる若干の帰結」は、1868年に発表された論文「人間にそなわっているはずと考えられてきた能力にかんする七つの問い」(Questions Concerning Certain Faculties Claimed for Man 『思弁哲学雑誌』第2巻)と同様、「反デカルト主義の精神」に基づいて執筆されたが、そこに提示されたデカルト主義に変わるパースの「新しい知識論」の原理を、次に引用したい。

1. わたしたちは内観の能力はもたない。内部世界にかんするすべての知識は外部的な事実にかんするわたしたちの知識から推論によって導き出される。

我々は完全な懐疑をもって始めることはできない。……それゆえ、出発点としての懐疑というのは、単なる自己欺瞞であって、真の懐疑となることはない(CP5—265)。

【引用者補足】わたしたちの自己意識にもとづかせるような哲学(訳者注：デカルト哲学)

から生まれたすべての偏見を除去しよう（引用者補足：デカルトの「推論機能」に対する「基本的な疑い」）。むしろ「わたしたちの心のなかで生じる出来事」について述べる命題を、「外部世界で生じる出来事」の説明に必要な説明に過ぎないと考えよう、と提言している（堂論文「二 すべての精神作用は推論である」）。真理は、「内観の能力」＝自我による「明証性」にあるのではない。

2. わたしたちは直観の能力をもたない。あらゆる認識は以前の認識によって論理的に限定される。

単一の個人を真理の絶対的な判定者とするのは、きわめて有害である（CP 5—265）伊東邦武『パースのプラグマティズム』より引用）。

上山春平は、「パースの真理説にとりわけ深いかかわりをもつのは、……2 の論点である」と、「他の点も切りはなして考えることはできない」とした上で、指摘している（『弁証法の系譜——マルクス主義とプラグマティズム——』未来社）。

3. わたしたちは記号を使わずに考えることのできる能力を持たない。

4. わたしたちは絶対に認識不可能なものを把握する能力をもたない。

【引用者補足】 パースは、「絶対に説明不可能なものを想定しても事実をすこしも説明したことにはならない」（CP—265）と言い、「知識不可能」論は、「探究の道」を塞ぐとして、容認しない。「科学の方法」（アブダクションの論理）からの「疑うふり」（デカルト哲学）への批判である。

（論文「四個の能力の否定から生じる若干の帰結」CP 5—265、『世界の名著 48』所収、中央公論社）

カント哲学（カテゴリー）の研究をしたパースは、「すべての思考が記号であるという命題と、人間の生活は思考の連続であるという命題から、人間が記号である」と証明できる（前掲論文）、—— パースによる人間記号論の提言である。この命題は、思考は、「思考者、思考内容、思考」という三つの関係の「系」であることに言及している（エリーザベト・ヴァルター『一般記号学——パース理論の展開と応用——』勁草書房）。とすれば人間記号論は、上記文節の「4」に対応する命題(statement)と想定できる。この命題に立脚する限り、デカルト哲学の基幹である「認識不可能」論は、パースが提唱する「科学の方法」を否定する誤謬的認識論に他ならない。改めて「人間記号論」の観点から自らの命題「内観の能力を持たない」（「1」）＝反デカルト主義について説明する、パースの言葉を確認しておきたい。

「絶対に認識不可能ものの存在を認めるデカルト的な原理に立つかぎり、事物の実在性を認識することは不可能にならざるをえない」という確信（は、）……経験主義的な傾向（翻訳者註：バークリー、ヒューム）のものであれ、精神主義的な傾向（翻訳者註：ヘーゲル、フィヒテ）のものであれ、ともに反デカルト主義的なものである。そしてわたしがここで提案する原則（人間記号論）もまさにそういった（反デカルト的）観念論的なものなのである（括弧内、引用者）（前掲論文）。

パースは、信念を確立する「科学の方法」（method of science）を自らの哲学の中核にすえ、「推論」の目的を「すでに事実の裏づけのある命題から出発して、事実の裏づけのできる新たな命題（新なる命題）に到達する」ことにある、と規定する（上山春平「プラグマティズムの哲学」『世界の名著 48』中央公論社）。とすれば、新しい命題に達するための「探求の方法」は、「疑念から出発して信念に到達する思考過程」であって、「その目的は信念の確立」にある（上山：前掲論文）。信念確立の「科学の方法」は「すべての人の究極の結論が同じもの」と定義し、パースは、その方法を以下のように論説する。

その方法（引用者註：科学の方法）は、信念を、人間的なもの（引用者註：自分一個の力）によってではなく、人間の外の

永遠なるもの (external permanency)、つまり人間の思考によって左右されないもの (十分な経験) によって決定するものであらねばならない (論文 The Fixation of Belief CP 5)。

信念は、「人間の思考によって左右されない」(内観の能力を持たない。直観の能力を持たない)、換言すれば、すべての人間が賛同する意見＝信念こそ、「真理」を意味しており、「意見によって表象されている対象こそ『実在』」であること、従って「実在」＝概念を論理的で明晰なものと説明する方式が、「科学的方法」(アブダクションの論理)である、とパースは、定義する (論文「概念を明晰にする方法」) このことは、「デカルト説」(概念確立の「先天的方法」) に対するパースの解釈を明確に示した内容と思う。パースによるデカルト哲学の解釈は、「四個の能力」で確認しているが、改めて論文「概念を明晰にする方法」(How to Make Our Ideas Clear 1878年の『ポピュラー・サイエンス・マンズリー』誌に発表。『世界の名著48』に所収) に拠って、確認しておきたい。

デカルトが哲学の改造を行ったとき、最初に手をつけたのは、方法上の懐疑主義を認め、権威というものを真理の究極のよりどころとみるスコラ哲学者の習慣を廃棄することであった。かれはそれをやったうえで、権威よりも自然な真理の原理をさがしとめ、それを人間の精神のうちに発見したと考えた。彼は最短コースを通して、「権威の方法」から「先天的方法」へ移ったのである (『論文集』「概念を明晰にする方法」)。

文節で指摘された「哲学の改造」のための「方法上の懐疑主義を認める」とは、「 $\beta-1$  デカルト哲学の思想的役割」で確認したように17世紀の西欧は、懐疑主義が渦巻いた文明的に「危機の時代」であったことから、自己意識 (「内観＝人間の精神」) を確立するための方法的懐疑をデカルトが、言明し実行したことの指摘である (cf. デカルト主義「2」)。

ところでパースは、4種類の「信念確定の方法」を挙げる (『論文集』第5巻、『世界の名著』「現代論理学の課題」「三探究の方法」所収)。「探究の方法」(methods of inquiry)の1つは、「固執の方法」method of tenacity)で、その特徴は「自己中心性」＝個人中心的な信念の確立である。第2は、文節で指摘された「権威の方法」(method of authority)を言い、「集団中心性」を特徴とする。即ち「古来、正しい神学的ないし政治的な教義を支持し、その普遍性と正当性を維持するための方法」を指している (論文「信念の確定」『ポピュラー・サイエンス・マンズリー』、『世界の名著48』所収)。第3は、「先天的方法」(a priori method)とされ、方法的特徴といえば、「理性にかなった」(reasonable、cf. 『方法序説』「第二部」:「理性の基準によって正しくととのえる」)「思弁的普遍性」であるのだが、デカルトの哲学は、この「先天的方法」(理性論)であると言う (CP 5)。

一般論理学は、「明晰」な概念を「どのような場合にそれと接してもそれだと分かるようにとらえられており、したがって、それをほかの概念とまちがえたりすることない概念」とし、『「明晰」な概念』を「明晰でないもの (「あいまい」な概念) をその内容としてまったくふくまない概念」と定義する (括弧内、引用者) (『パース論文集』、「現代論理学の課題」「第二章 第二章 概念を明晰にする方法 — 『明晰』と『判明』」『世界の名著』所収) が、デカルトには「絶対確実性の第一の条件として、概念が明晰に見えるということと概念が本当に明晰であるというこいとを区別する考えは、念頭になかった」、即ち「自分の精神内容に関して内観 (引用者註: 自己意識) の証言を疑う理由」がない、とする解釈から、デカルトは、「明晰且判明」(論理学の規則に代わる「四規則」の第一に「明晰にかつ判明に、私の精神に現れるもの以外の何ものをも、私の判断のうちに取り入れない」とある『方法序説』「第二部」>) であることを正確に説明していないので「推測」であるが、と断った上でパースは、次のように批判的な説明を加えている。

(デカルトは) 概念は明晰であるばかりでなく、同時に明晰であることを必要と考えるようになったのでは在るまいか。……このことによって (デカルトが) 意味しようとしたのは推論による検討のテストを受けなければならないということであろう。それは、言い換えれば、概念は最初に明晰に見えるだけではなく、討論にかけてもあいまいな点をあばくこと



ができないほどでなければならないということである（括弧内、引用者）（『論文集』「Ⅰ 現代論理学の課題」第二章 概念を明晰にする方法 デカルトの説）『世界の名著 48』所収）。

信念の確立方法の第4が、すでに概略した「科学の方法」(method of science)であるが、「思想と事実が一致する」＝結果（信念）をもたらす科学的方法の特徴は、「信念」を行動のための規則——思考（思想）が得られた時の「終着点であると同時に新しい出発点である」とする（「われわれの概念を明晰にする方法」）。なぜなら「懐疑から信念へ」の推論は、個々の認識作用としての先天的方法に基づかない実験的形式であるからである。伊藤邦武は、パースの目的は「科学を……特に実験科学をモデルにした哲学の再構築」であった、と捉えている（『パースのプラグマティズム』）。

以上「Ⅲ」の考察作業を踏まえて要約すれば、「思想と事実の一致」した「客観的真理（信念）は、デカルト哲学の先天的方法ではなく、科学的方法のみによって到達する」（括弧内、引用者）と、パースは、言明し、「探求の三段階における推論過程」での信念確定の方法（CP2—760.）、即ち「プラグマティズムの格率」(Pragmatic Maxim CP5—358~410、論文「概念を明晰にする方法」の中で言明）の正当性を、宣言したのである。

「プラグマティズムの問題を注意深く考えれば、それがアブダクションの論理の問題にほかならぬことに気がつくであろう。すなわち、プラグマティズムは格率を提案する」（PC5—196、W・H・ディヴィス『パースの認識論』から再引用）哲学的体系であると明言し、「科学の方法」を支える基本的思想態度の「基準」である「理解の第三段階（引用者補足：推論の帰納過程）の明晰さ(the third grade of clarity)に到達するための規則（プラグマティズムの格率）」（括弧内、引用者）は、つぎのように定式化できる（引用者補足：仮言的命法＝前提「もし～ならば、～してみよ」、帰結「すると～となる」）と提言している。

ある対象の概念を明晰にとらえようとするならば、その対象が、どんな効果を、しかも行動に関係があるかもしれないと考えられるような効果をおよぼすと考えられるか、ということをよく考察してみよ、そうすれば、こうした効果についての概念は、その対象についての概念と一致する（論文「概念を明晰にする方法」、『世界の名著48』所収）。

定式化された「プラグマティズムの格率」を適用することによって『『实在』ということばで意味しているものと、『实在』という概念が依拠している事実を、非常に明晰に理解することができ（論文「概念を明晰にする方法」）る、とする意味の仮言的命題が成立する。なおこの「格率」には、パースによる3つの「原注」があり、「原注3」には、プラグマティズムは「思想を究極的にはもっぱら行動、それも概念で把握された行動に適用させる」と追記している（久野 収訳「われわれの概念を明晰にする方法」CP5、世界思想教養全集14『プラグマティズム』所収、河出書房新社）。

#### Ⅳ、探究の「科学的方法」——探究＝信念確立の三段階について——

##### 1、間違い主義とアブダクションの論理

『誤りは人間の常』という格言が、パース哲学の体系的発端である（「私の哲学のすべては間違い主義から育ってきた」CP1—14）、「間違い主義 (fallibilism) の原理」によって「疑う余地のない真理（信念）を探す」（括弧内、引用者）（W・H・ディヴィス『パースの認識論』産業図書）推論＝アブダクションの論理は、1867年『アメリカ・アカデミー会報』(Proceedings of the American Academy of Arts and Sciences) に発表した論文「推論の自然的分類」(On the Natural Classification of Arguments)、「論理的な内包と外延」(Upon Logical Comprehension and Extension)で述べている（上山春平『弁証法の系譜——マルクス主義とプラグマティズム——』未来社）。が、信念を確立する推論過程——アブダクション過程と帰納過程の本質は、可謬性であるが、「思考の情態的要素」(心の働き)により、原理的に不可謬的である純粋な演繹的過程でも方法的に「誤り＝間違い主義」が発生する可能性のあることを認めなければ

ならない、とパースは、説く。

（「単なる個人の知性」を超えた）連続性の原理は、客観化された可誤主義（まちがい主義）の観念である。というのも、可誤主義とは、我々の知識は決して絶対的なものとはならず、いわば常に不確実性と非確実性との連続体のうちに浮遊している、という理論だからである。そして、連続性の理論とは、一切のものがそのように連続体のうちに浮遊している、と言う説なのである（括弧内、引用者）（CP 1—171）。

文節で言及する「fallibilism」（まちがい主義）とは、いかなる論理構造であるのか。パースによれば、真理（真の認識）は、デカルトが試みた「明晰な一つの論証」（「理性にかなう」先天的方法）に従うのではなく、「信念確立の三段階」——（1）アブダクション（仮説定立 Abduction）から始まり、（2）ディダクション（推論 Deduction）で予測を行うが、（3）インダクション（検証 Induction）は、実験（仮説のテスト）を行い、「予測が検証される基準に照らして、その仮説が真であると結論する」、所謂「探求」の総合的な推論過程を辿って形成される。

上述の論説を要約すれば、「科学の方法」は、「自己修正的な過程」（まちがい主義）である。「可謬的なひとつの自我(a self which is fallible)を想定する」（CP 5—234～235）「科学の方法」は、誤謬を犯しながら究極目標としての「実在」＝結論（信念の確定）に向かって連続的な発展をして行くのである。つまり真理は、内観的明証性にあるのではない。では、誤謬主義を基底におく「信念」確立の三段階は、どのように論説されているか、パースの言説「次節 2」で直接確認しておきたい。

## 2、探求(Inquiry)の三段階 —— 信念の確立が唯一の目標 ——

探求の三段階（科学の方法）が「アブダクション — ディダクション — インダクション」の、三つの推論過程から構成される理論であることは、既に確認した。換言すれば「探求」は、「疑問から確信にいたる過程」（『論文集』「信念のかため方」The Fixation of Belief、「探求」の最終定式は、CP 6—358～387で論述）のことで、従って「信念（belief）もしくは意見(opinion)の確定こそ探求の唯一の目標である」とした命題を、パースは、明言する。

真の探求は真の懐疑の状態が生ずるにいたって始めて開始され、信念に達するや否や終わるという単純な理由から、真理、すなわち探求は「信念を固めること」、言い換えれば、満足の状態にのみに存する、と仮定している（CP 6—485、遠藤 弘編訳『パース著作集3』）。

### A. 論証 (Argument) —— その三分法＝推論過程のサイクルについて

プラグマティズムの本質である論証の三分法とは、記号論(Semiotic)の産物としての基本的カテゴリーであるのだが、「すべての個々の論証を演繹、帰納、およびアブダクションに分ける」「三つの様式」ことである、とパースは規定する（括弧内、引用者）（内田種臣編訳『パース著作集2』＜『論文集』＞勁草書院、CP 2—266）、つまり探求過程の総体を言い、一つの確定的な「信念」を生み出す推論過程のことである（CP 6—454）。繰り返して言えば、探求の目的は、規則正しい法則に従った推論によって「一つの真なる結論」（the one True conclusion 『論文集』「信念の確定」）に達することで、「現象（事物）」を統一的に説明すること（信念の確立）にある。

なお論証のための推論には、「論証、帰納、およびアブダクション」の個々に「前提」と「結論」があるとした上で、推論のなかの観察において、もし前提が真であれば、結論は、「常にあるいは大抵真でなければならない」（内田種臣編訳『パース著作集2』＜『論文集』＞CP 7—536）と論証している。

「研究ノート」の作業で確認している「探究の方法」の核心は、「新しい仮説を、演繹や帰納などの操作によって整備し確証する」（鶴見俊輔「数学・瘦軀量技術から世界観へ —— チャールズ・サンダース・パース ——」思想の科学研究会編『アメリカ思想史 第3巻』、日本評論社）ことにある、その意味で「探求」は、事実（現象）の説明的仮説を形成する

「アブダクションの論理」(the logic of abduction)である。「新しい仮説」を論証する「三文法」(アブダクションの論理=仮説設定、演繹、帰納 CP 2-96)について、パースは、どのように論説しているか、ランダムであるが、確認しておきたい。

(a). アブダクション Abduction (文節に付した括弧付けの番号は、引用者による。(b)、(c)も同様)

- (1) (アブダクションとは、) 説明的仮説を形成する過程 (引用者補足: 仮説形成過程) であり、何らかの新たな観念を導入する、唯一の論理的操作である (『論文集』CP 5-171。括弧内、引用者。伊藤邦武『パースのプラグマティズム』勁草書房からの再引用)。
- (2) 仮説形成は、新しい観念を提供するただ一種類の推論であり、その意味で、ただ一つの総合的な種類の推論である (『論文集』CP 2-777。前掲書からの再引用)。
- (3) リトロダクション (Retroduction 遡源推理 <引用者補足: アブダクションと同一>) は仮説の暫定的採用である。というのは、そのあらゆる可能な結果を実験によって検証できるからである (『論文集』CP 1-68。W・H・ディヴィス (赤木昭夫訳)『パースの認識論』から再引用)。
- (4) 遡源推理は確証性を当てることはない。仮説はテストされねばならない (CP 6-470)。
- (5) (探求の第一段階を成すものとみなす) 特徴的な推理方式を遡源推理と名づける (括弧内、引用者がパースのことばを挿入) (遠藤 弘編訳『著作集』3 (『論文集』) CP 6-469 勁草書房)。遡源推理は確実性を与えることはない。仮説はテストされねばならない。……仮説に検討を加え、その真理から帰結するあらゆる種類の条件法的な経験的結果の例を検討することから始めなければならない。これは探求の第二段階を形成する (遠藤 弘訳『著作集』3 CP 6-470)。
- (6) アブダクションというのは、一般的予測を形成する……それはわれわれの未来の行為 (信念の確立) を合理的に規制する見込みのある唯一のもの (である。) …… (括弧内、引用者)、(CP 2-270、内田種臣編訳『パース著作集』2 <『論文集>』勁草書房)。

上述の文節を総合して言えば、探求の第一段階である「アブダクションの過程」とは、「①現象の観察を起点とし、②仮説の発見をへて、③仮説の定立に終わる」(アブダクションの過程が終わる)「新しい理論の発見」をする唯一の過程であり、仮説を受け入れる段階でアブダクションの過程は、終了する (上山『弁証法の系譜』)。従って信念確定 (結論) の前提となるのが、仮説である (論文「信念の確定」)。が、この仮説的推論過程は、形式化することができない (上山春平 前掲書)。なぜならパースによれば、仮説は限りなく存在し、「間違いを犯しやすい」(間違い主義) からである。その意味で、検討のできない「仮説」を認めなかった実証主義 (コント、ポアンカレ) とは異なり、プラグマティズムの格率の正当性を提唱するパースは、「完全な実証主義を認めなかった」(CP 2-511、5-198、W・H・ディヴィス『パースの認識論』)。

(b). ディダクション Deduction (演繹は、解明すること、それがすべてである CP 6-475)。

第二段階の「推論」は、アブダクションの提供する「仮説」を検証 (仮説のテスト) するために、仮説を論理的推論の前提に組み替え、あらゆる可能な結論を引き出す「仮説判断の過程」(心の働き mental action=推論) のことで、仮説をテストするための段階である。「この過程は、①仮説の解明 (Explicate 論理的分析) と②論証 (Demonstration 演繹的推論 (deductive reasoning))」(どんな結論を引き出すことができるか、思想のレベルで試験する過程=ディダクション) からなり、従って直接「事実」(現象) に関わることはない (上山前掲書。遠藤 弘編訳『パース著作集』<『論文集』>CP 6-472)。

- (1) 演繹には二つの部分がある。その第一の段階は論理的分析によって仮説を解明すること、すなわちその仮説を可能な限り完全に明確なものにすることでなければならない。……次に証明、すなわち演繹的立証が問題となる (遠藤 弘編訳『パ

ース著作集』<『論文集』3> CP 6—472)。

(2) 演繹の目的、つまり仮説の帰結を集めるという目的が十分に達成されてしまうと探求はその第三の段階(引用者註: インダクション)に入る(前掲書 CP 6—472)。

(3) 演繹というのは、その解釈項が(長い経験の結局、その前提が真であるものの大部分が真の結論を持つようになるところの)一般的なクラスに属するものとして表意する論証である(括弧内、パースの論説を引用者が、挿入)(内田種臣編訳『パース著作集2』<『論文集』>CP2—267)。

演繹は必然的であるか蓋然的である。必然的な演繹というのは、……真な前提からは必ず真な結論を産出しなければならない(CP2—267)。

(4) 仮説に検討を加え、その真理から帰結するあらゆる種類の条件法的な経験的結果の例を検討することから始めなければならない(CP6—470)。

(c).インダクション Induction (帰納は、評価すること、それがすべてである CP6—475)。

第三段階の「帰納的推論」(inductive reasoning)とは、学的知識を大前提とし、真と認めた仮説を演繹的前提として組み込んだとき、得られた理論的結論、即ち演繹された仮説の真理性を確証する過程であって、①分類(Classification)、②試験(Probation)、③判定(Sentential part)からなる(上山春平『弁証法の系譜——マルクス主義とプラグマティズム——』未来社)。「推論」は、創造的で検証的な推論過程である。

(1) 帰納は検証的推論過程であるが、「或る理論から出発して、そこから予見される現象が理論に対して『いかに近似的に』合致するかを知ろうとして、この現象を観察する」過程である(伊藤邦武『パースのプラグマティズム』)。

(2) 帰納とは理論の実験による検討である。……帰納は理論を解き明かし事実との一致の程度を測定する(CP 5—145、ウィリアム・H・ディヴィス『パースの認識論』かの再引用)。

(3) 帰納はわれわれを誤謬に導くかもしれない推理の一種であるが、十分根気強く行えば、あらかじめ指示されたどのような程度をも下回るほど誤差を小さくしうることが、帰納的に確実(……)である……(CP 6—474 遠藤編訳『著作集』<論文集>3)

(4) この段階(帰納)には三つの部分がある。……それは分類からはじめなければならないが……これにつづいてテストをするための立証、すなわち検定が来る。そして検定全体は第三段階の判定の部分と結びつく。この部分は機能的推理によって異なる検定の一つ一つを評定し、次にそれらの組み合わせを評定する、それからこれらの評定そのものを自己評定し、その結果全体についての最終的な判定を下す(前掲書 CP 6—473)。

(5) 帰納と言うのは一定の問いに関する命題的象徴記号を形成する方法であり、……この方法が固定されるならば、この方法によって結局すべての問いに関して、真理が生みだされるだろう、あるいは、真理への無限の近似が生み出されるだろうということを表意する(内田種臣編訳『パース著作集2』<『論文集』>CP2—269)。

「認識活動における三者(引用者補足: アブダクション、ディダクション、インダクション)の相互関連」=「探求過程のサイクル」について、論理的解釈からの捉え方を論じたのが、上述の文節である。これを踏まえてパースは、「探求の三段階」(論証の三分法)を「要約」して、下記のように論じている。

(1) アブダクションは、仮説を形成する過程であり、ディダクションは、そのヒントにもとづいて予見をひきだし、インダクションは、この予見をテストする(過程である)(括弧内、引用者)『パースの論文集』CP5—171、上山『弁証法の系譜』からの再引用。最終の定式は、『論文集』CP 6—468~473)。

(2) 演繹は或るものがそうであらざるを得ぬことを論証し、帰納は或るものが現に作用していることを示し、仮説形成はただ、或るものがあるかも知れぬことを示唆するのである(『パース論文集』CP 5—170、伊藤邦武『パースのプラグマ

ティズム』からの再引用)。

推論過程の中で「帰納の問題」は、「一種のアブダクションの問題」——「多様体から統一体への還元」(CP5-275~276)をする「心の働き」(推論)である、従って帰納とアブダクションを特に「関係のある推論」と、パースは、見るのである。ところで確認してきたパース哲学の論理的な「探求過程」の全体像(推論のステップ)は、下図のように要約して定式化される(上山春平『弁証法の系譜』からの引用)。

#### 第一図 論証の三分法 —— 探求過程の段階的サイクル ——

- (1) アブダクション (仮説形成過程)  
↓ ①現象の観察 → ②仮説の発見 → ③仮説の定立
- (2) ディダクション (演繹的推論過程)  
↓ ①仮説の解明 → ②論証
- (3) インダクション (検証的推論過程)  
①分類 → ②試験 → ③判定

註：図中の記号「→」、「↓」及び括弧内の推論過程は、引用者が挿入。「→」は、それぞれの推論過程(ステップ)における推論の「前提から結論へ」の移行を表示し、「↓」は、推論の段階的な移行＝探求過程のサイクルを示す。

### 3. 「探求の方法」の具体例 —— 大陸移動説について

「プラグマティズムの問いとは、仮説形成についての問い」(CP 5-197)とした上で、パースは、「仮説形成に際しての推論は、一般に次のような形式をとる」(CP 5-189)と言う、一般的な仮言的命題＝プラグマティズムの格率(筆者補足：前提：「もし～ならば、～してみよ、帰結：すると～となる」)である(論文「プラグマティズムとは何か」)。即ち記号が、どのように理解されるか、と言う問題であるが、記号の理解をパースは、「仮言的、定言的、相関的」の三分法に区別している(カントは、判断を「判断の仮言的、定言的、相関的」に区分しているが、この三分法がパースに示唆を与えたクエーザベト・ヴァルター『一般記号 —— パース理論の展開と応用——』)。プラグマティズムの格率(自分のために採用する行為の規則)に従った記号理解のあり方＝仮言的命題の作用(言明)をパースは、以下のように説明する。

1、驚くべき事実C(引用者注：現象)が観察されている。

2、しかし、もしA(引用者注：仮説)が真であるならば、Cであることは当然の事柄であろう。

「～でなければならない」という表現の意味していることは、(A)が偽りでない限り、(……)Cは真(あるいは本当らしい)であるということばかりでなく、これと類比的な前提と結論はすべて同じ関係の中にある……。((A)は、引用者による表記、CP7-536)

3、それゆえ、Aは真ではないか、と考える理由が存在する(伊藤邦武『パースのプラグマティズム』からの再録)。

文節で説明された「当然の事柄」という表現は、論証「Aが偽りでない限り、Cは真である」必然の正当性であって、従って「2」から「3」の論証「Aは真である(偽りでない)」から「Cは真＝事実である」が成立する(「真実なものはすべて実在的なものである」論文「プラグマティズムとは何か」『論文集』所収)。推論の方法は、A＝仮説とC＝事実の結合(推論における「前提」と「結論」の結合)であり、「記号とみなされた思考はすべて、後続する思考のなかで説明され解釈される法則」(「四個の能力の否定から生じる若干の帰結」)の精神作用を言う、「思考」とは、「記号の使い方」のことで、一つの思考の行動(プラグマ)、習慣(行為の仕方、方式＝演繹や帰納の操作によって仮説を形

成)である。事実を説明するための「仮説を思いつくという段階(引用者註:説明のない現象についての、説明的仮説を形成する過程=アブダクション)を特に重視する」のが、「パースの特徴である」(鶴見俊輔「数学・測量技術から世界観へ——チャールズ・サンダース・パース——」)。

筆者が理解しているレベルであるが、「探求の三段階」(「現象」の統一説明)を示す具体例を挙げたい。ヨーロッパ大陸とアメリカ大陸の両岸の類似性(事実C 現前に存在する対象または自称で、「個記号」を言う)から想定された仮説=「大陸移動」説(説明的仮説=Aの形成)を小前提とし(アブダクション)、学問的知識——古気候学、古生物学、古地磁気学、岩石磁気学等ニューカルス学派の研究成果(磁場移動曲線によって、中生代のジュラ・白亜紀ころに、アメリカとヨーロッパの分裂が始まった、従って大西洋は存在しなかったことを説明)を大前提(ディダクション)とすると、二つの前提(地質構造)から導き出された結論=巨大大陸(原始大陸パンゲア pangea)の分裂によって現在の大西洋(現象=実在)が出現した(インダクション)、とする理論的結論(絶対的真理)は、「大陸の両岸の類似性」という前提から大陸移動の「事実」=結論の解明(推論:Aは、偽りでない限り、Cは、真実=必然的結論)であり、パースの言う「探求の三段階」論である。仮説は、近代的科学に基づいた解釈(人間の「心」を離れた外部的な「事実」を認める)によって客観的真理(「すべての人の「究極的結論」ultimate conclusion が同じもの」として認知されることになる(竹内 均・上田誠也『地球の科学——大陸は移動する——』NHKブックス)。

具体例から「アブダクションの論理」とは、「プラグマティズムの格率」を探求方法の基幹として、疑念(前提)から「事実=実在」(終結)に到達するロジック(命題:Aは、真である。従ってCは真実)である、と理解できる。改めてパースの論説で確認しておきたい。

すべての研究者が賛成することがあらかじめ定められている意見(思考=記号)こそ、わたしたちが「真理」(結論)ということばで意味しているものであり、こうした意味によって表現されている対象こそ「実在」(結論)にほかならない。これが「実在」という概念を説明するわたしの方法である(括弧内、引用者)(「概念を明晰にする方法」)。

## V. 結 語

パースが提唱する「探求の哲学」(アブダクションの論理)を踏まえて言えば、デカルト哲学の命題「われ思う、故にわれ在り」は、「推論の力」によって彼自身の存在(実体)を確信することにあつた(要約:デカルトの哲学体系の基礎は、すべての認識は素朴な直観にもとづくという信念から成り立つ。〈先天的方法〉)が、パースによれば、明晰判明なデカルト哲学の第一原理は、「推論力」の信頼性を十分に検討しない(「説明不可能」なものと定義)「仮説の証明」であつた、従って「人間の思考によって左右される」「推論力」が信頼できないとすれば、デカルトの命題は、成り立たない(ウィリアム・H・デイヴィス『パースの認識論』第五章 デカルトの循環。注意点:パースの哲学体系の基礎は、認識とは「流れる推論の過程」である、と要約できる)。自己意識=自我は、「真理の判定者ではない」(伊東邦武『パースのプラグマティズム』)。

「わたしたちの自己認識にもとづかせるような哲学」=デカルト哲学(信念確立の基準=理性にかなう)から「生まれたすべての偏見を除去しよう」との言明は、パースの反デカルト主義の立場(科学の方法)を端的に象徴する言葉である(cf「Ⅲ-2」の「四個の能力の否定」)。即ち「不完全な推論とは、前提のなかにふくまれていない事実とその推論の正しさ(理性にかなった)が依存するような推論」の否定であり、従ってデカルト哲学への、アブダクション論理学(信念確立の基準=思想と事実の一致)からの批判である。